

第二節 政 治

〔1〕 安芸国知行帳（安南郡のみ抄出）（元和五）

「自得公済美録」卷十二下

安南郡

一千五拾石貳升	鎌刈島	一八拾七石貳斗九升	山田村
一八十七拾六石九斗五升	瀬戸島村	一五九十九石六斗六升	坂村
一三十八拾石八斗八升壹合	はやせ とのこ島村	一五〇貳拾七石五升	やけ山村
一三六拾六石七斗貳升七合	たわら なへけこや村	一五〇六拾五石貳斗八合	上瀬野村
一八五拾石三斗八合	とりのひら 倉橋島村	一七〇七拾六石四斗六升貳合	下瀬野村
一五〇八拾三石七斗四升七合	吉浦村	一三〇六拾四石六斗	にほの島村
一三〇九拾石七斗五升九合	江田島村	一〇八拾四石七斗壹升	屋賀村
一拾三石九斗	しんかい 江田島村	一〇七拾七石八斗六升七合	だん原村
一五〇九拾石七斗三升三合	わせう村	一三拾石	めうせういん村
一五〇三拾五石七斗貳合	せう村	一貳百七拾八石四斗七升六合	大須賀村
一四〇拾貳石貳斗貳升貳合	宮原村	一貳百九拾壹石五斗八升三合	おなか村
一〇七拾壹石七斗五升八合	栃原村	一〇八拾壹石五斗貳升	へさか村
		一〇六六拾六石壹斗三升七合	中野村
		一四拾八石三斗八升	海田村
		一三〇三拾七石壹斗六升	舟越村
		一三拾三石四斗五升九合	はく島村
		一〇八五拾六石六斗二升貳合	符中村
		一〇〇貳拾四石八斗七升	ぬくしな村

一千六百六拾五石五斗八升

奥海田村

一七三拾石壹斗五合

牛田村

一七〇式拾八石四升

中山村

一千九百式拾四石四斗三升

矢野村

一七千七百四石五升

熊野村

一八百四拾六石壹斗四升

はたか村

一貳百拾式石四斗六升九合

繩代村

小以貳万五千三百五拾六石六斗八升五合

[2] 山番人・山番給の届出書

熊野町 織田家「諸書附上り控」

覚

安芸郡川角村

火の原  
一御建藪壹ヶ所

石亀山  
一御建山壹ヶ所  
(浅野豊前様御山)

一米壹斗 但右両所番人久右衛門給米

右之通ニ御座候、以上

(宝曆十三) 午正月

庄屋

太兵衛

割庄屋矢野村

孫太郎殿

[3] 末田每登の給人法

熊野町「和田実行家文書」

覚

一万事御代官所被申付候趣堅相守、親ニ孝を尽し兄弟睦敷、長者を敬ひ幼者を懐け一家之親ニ厚く、友

百姓熟和ニ節儉相守、正道ニ相暮し農業出精候様、

小百姓末々まで厚く可申聞候事

一郡割諸入用其外割賦等、毎年御代官中吟味之上被申

付候事ニ候間、違背仕間敷候事

一壹ツ成差上米御代官中被引受、上納有之筈ニ候間、

念入無遅滞相納相済候者、其段可申出候事

一所務之儀米拵念を入、繩俵相応ニ宜敷仕立、請米之

節直し無之様ニ可仕候、米出来候者百姓人別ニ取納

割仕、此方相究候日限無遅滞納所仕らせ可申候、

納所不相済内米売払不申様稠敷可申付候、是等之趣

外に相聞へ候者、其百姓へ不及申給庄屋まで可為曲  
事

一 銀納仕候節ハ霜月晦日までハ町相場ニ式匁上ケ、極  
月朔日以後ハ上納相場之通可申付候、随分出精前廉

ニ相納可申事

一 組内免割仕候節前廉ハ月限相触、百姓不殘立会委細  
吟味之上、無益之物入無之様相究可申候、若し百姓  
之内参違候者有之候者、追て其段申合せ得斗吞込せ  
可申候、尤百姓人別ニ下札通渡し置、百姓手前へ

ハ年中出し候米銀委細ニ記し、其暮ニ至り算用明白  
ニ仕、兎角百姓共疑ひ無之様可仕候、諸算用之義相  
尋候者、幾度にてモ百姓共合点参り候様、懇ニ可申  
付候、得斗吞込ミ不申者を叱り不申、幾重にも解聞  
セ給庄屋疑を受不申候様ニ取斗候義刊要ニ候事

一 給庄屋初小百姓迄大槩之用事ハ此元江罷出申間敷、  
無抛子細有之砌者格別、其外ハ納米差出候序ニ相濟  
せ候様可致候事

種米貸渡し候節ハ帖面ニ人別印形取、此方江差出し

可申候、其外貨物等有之節茂右同様可致事  
一 餅米并粃米入用之儀ハ追而割賦可申付候事

右之条々組中之小百姓末々迄、堅相守候様可申聞候  
以上

文化十年癸酉八月

末田每登

安芸郡熊野村

給庄屋

九右衛門とのへ

〔解説〕 広島藩では上級の家臣の俸禄は、その給知（知  
行<sup>ぢやう</sup>地）という名目で指定された村の、田畠から上納され  
る年貢米を、その耕作農民である給知百姓から直接に受  
け取る「地方知行」という仕組で与えられる仕組となっ  
ていた。本史料にみえる末田每登は文化十一年（一八一  
四）大御小姓の役についており、熊野村では文政三年  
（一八二〇）四八石二斗の知行地を与えられていた（全  
体の禄高は不明であるが、一〇〇石以上であったと思わ  
れる）。したがって、俸禄の受け取りを通じて、熊野村の  
農民との関係が生まれているので、その百姓たちが藩の

II 資料編

農政の役人である代官以下の命令を守り、家内や村内の人たちと仲よくし、農業に励むとともに、年貢その他の上納を怠りなく済ますべきことを、知行主からも監督し、農政の一部に関与する仕組みになっていた。

[4] 村役人に関する報告書

熊野町「織田信家文書」

覚

安芸郡

川角村

一村々役人何年以前より、何役・何年相勤メ候哉、其

段書付差出候様ニ被為仰付奉畏候、左ニ奉申上候

一天正六寅年より私先祖四郎右衛門、庄屋役式拾年相

勤メ申候

一慶長四亥年より四郎右衛門倅孫右衛門、庄屋役廿三

年相勤申候

一寛永十四年より孫右衛門倅伝三郎、庄屋役三拾四年

相勤申候

一慶安三年<sup>〔寛〕</sup>、伝三郎倅四郎右衛門、庄屋役拾七年相

勤申候

一万治式亥年、四郎右衛門倅伝兵衛、庄屋役十年相勤

申候

一元禄十三辰年より伝兵衛倅吉兵衛、庄屋役四拾老年

相勤申候

一享保二酉年、吉兵衛倅太兵衛幼年ニ而、伯父源兵十

八年相勤申候

一元文式巳年より甥太兵衛、十九年庄屋役相勤申候

一宝曆七丑年より太兵衛倅四郎右衛門、四拾式年相勤

申候

一寛政十年年より四郎右衛門倅四郎右衛門、当役拾七

年相勤申候

年数合凡式百四十年 但文化十一戌年迄

右之通ニ御座候、以上

〔文化十二〕  
戊正月

庄屋 四郎右衛門

割庄屋上瀬野村

太右衛門殿

[5] 郡中村々へ諸事心得べき条々申渡覚

熊野町 佐々木忠夫家「御触状写」

申渡覚

一 前々々被仰出候御法度之趣ハ不及申、追々御代官所  
ノ申付候趣、堅相守可申事

附、於他国目安差出し候儀、御停止ニ候、猶又未  
々まで、堅可申付事

一 忠孝之儀第一忘却不仕、親類・朋友睦敷・農業出精  
候之様、末々迄可申聞候、常々役人共心を付、善悪  
相考、勝れ候者も在之節ハ、委細可申出事

但シ近年も追々孝子寄特之もの申出候分、相当之  
御賞被成下候得者、申迄茂無之候得とも、御憐愍  
之御趣意忘却仕間敷事

一 郡中村々役人并百姓、末々迄茂身持暮方之義、兼々  
申付候趣、忘却不仕、質素之古風儉約越相守可申事

附り、御城下・近郡ハ末々迄も何となく、町方之  
風俗ニ移リ易きものニ候間、役人共常々心を付、  
勿論着服等之儀、追々申付候通相守可申様、常々

相示し可申事

一 村作法猥無之、侍中初御奉公人末々迄、往来之節、  
不礼之儀無之様、末々迄可申付、且御城下へ罷出候  
節、諸事相慥、無用之義ニ町方江逗留いたし方々徘徊  
廻不致様、可仕候事

一 就御用出郡之面々、并家来共ニ至迄、定法認之外馳  
走ケ間敷儀、堅ク仕間敷、賄賂筋ハ勿論、少し之品  
たりとも送り候儀不仕、別而近年糶敷申付候趣相守  
可申事

一 遊者村内ニ差置不申様、役人とも可心付候、并追放  
立歸りもの等ハ、見当次第追払可申、其外胡乱者付  
せ申間敷事

但浦島船着之場所、役人共別而厚相示し可申事

一 博奕其外賭もの・諸勝負、并御他領富へ携り申間敷  
旨、追々糶敷申付候通ニ候得共、若不沙汰ニ仕置候  
ハ、役人共迄急度曲事可申付候事

一 馬方・人足・水主之者行路之儀、前々々申付候通  
り、弥糶敷申聞せ、尤往還并川筋ニ而茂、間々心得

違・非礼之者も在之様ニ相聞へ、士列之面々ハ勿論、其外御家人江対シ失礼之義無之様、手堅相示可申、士列之面々と見請候ハ、早速笠・ほうかぶり越取、法外之□無之様、急度可申付事

一 火用心之義、追々申付候通り、平日油断不仕、銘々念入、端々迄も不絶見廻り候様申付、別而秋冬ニ至風立節、市町者勿論村役人共、無意見廻可申事

一 唐物抜荷、弥無怠毎月相改、証文前々之通月限り調置、年分之証文翌正月始メ、一緒ニ可差出事

附、近年従公儀被仰出候趣、委細示シ置候通、弥以忽緒之義無之様、厚可申聞候

一 御貸シ鉄砲・獵師鉄砲在之村々ハ、猥成儀無之様仕、若持主死失仕候ハ、鉄砲相改役人共預置、注進等之義延引仕間敷事

一 御建山之義、山番之者共不怠見廻り、并役人共無油断心越付可申事

附リ、端山縮リ合之義、毎歳御山方より触示有之、譬銘々田畑辺リニ而茂、御用木無願伐り取候

儀ハ、不相成事ニ候之条、下方之者共御制度筋能相心得居候様、平常厚ク可相示候、端山所之義役人共ハ勿論、山番之者共不絶心を付、忽緒之義無之様可仕候

一 往来之旅人・人馬無滞様ニ、取計可申候、若煩ひ又ハ変有之時者、其所ニ而先宜敷取計置、早々御代官所江注進いたし、可請裁許事

一 村送り状、少茂無遅滞様、念入相送可申事

一 郡割・免割・夫割之義、兼而申付候通、常々割庄屋共苦勞仕、少茂失墜無之様可仕候、尤村役人共村用無滞様心を付、相勤可申候、諸算用之義ハ別而念入、年行司・月行司・長百姓打寄、一筆限儀論仕

せ、小百姓共迄も得斗申聞せ、疑敷義無之様可仕候、仕来ニ泥ミ不申、厚及儀論、物入相減、免割帳欠り候様勘弁仕、百姓共取続キ第一ニ心を付、耕作精出シ、農具等茂丈夫ニ所持仕候様、常々可申聞候

事

但シ郡割・免割帳増減之義者、前年と引合せ如何

様之訳を以と申儀、書記可申候、其外入役筋、定免ニ相成候村々ハ、免割帳大辻ニ而差出候事故、

諸出来・入役等取立之小内、村方控帳面疑敷義無之様致置候儀、勿論ニ候得共、見合入用之節ハ、何時ニ而茂差間無之様取計置可申、尚又入役辻免之余米取立候義ハ、不相成事ハ兼而申付候通り、厚可相心得、可成丈辻免之内相減候様入力を、余米等有之候ハ、其員数免割帳へ書頭、可差出事一普請所数ヶ所申出候義、無益之事ニ候間、取締ひ不申候而、不相叶所迄を相弾、夫懸リ多無之様念入、精出し相認メ可願出事

但シ、春普請帳并起地有無申出等も、兼而申付候通、日限延引仕間敷忘却事

一社倉法之義者、兼々申付候通、御趣意忘却不仕、方々念入、下方疑惑筋無之様、深切ニ申及シ、縮リ合之義少も匱略無之様、入力取計可申事

一種籾遂吟味、種おろし可仕義ニ付、近年委細示筋申付候趣、一統手堅相示シ可申、出来米不宜候得者、

銘々之難儀ニ相成事ニ付、素油断ハ仕間敷候得共、不絶相示シ可申事

一都而諸上納物之義、年々示シ筋申付候趣も有之村々共、素相励候趣ニ者候得共、近年打続御年貢方一統相励、是迄御本斗払詰メ勘定目錄差出候段、其方共者勿論末々迄、別而風儀宜甚神妙之至、我等共ニおゐても令満足候、此等之趣ハ厚遂ふれ可遣候、右ニ付当年茂出郡之義ハ相止メ、於御役所勘定承届遣候条、此旨相心得、一統百姓共へも不洩様可申聞事右之条々写置、堅相守、末々迄不洩様可申聞候、若違背仕ニおゐてハ、急度曲事可申付もの也

吉田矢柄

〔天保三〕  
辰閏十一月

佐々惣大夫

割庄屋

年寄

村々

[6] 初寄合諸格式帳

熊野町 佐々木忠夫家所藏

(表紙)

安政貳年  
初寄合諸格式帳  
卯正月十一日  
熊野村

(長帳)

庄屋  
組頭共

- 一米拾壹石
- 一同四石五斗
- 一同六石六斗
- 一同六斗
- 一同六斗五升
- 一灯油八升

庄屋給  
組頭給  
筆者給  
年行司給  
用所入木代

内  
本郷  
新宮  
筆者元

一米壹石壹斗

内  
七斗五升  
三斗五升

所藏下御年貢藏両給共

李右衛門

百平

所々宿賃米

広島宿世良屋卯助

海田市

所夫宿卯助

米入宿賃米

旅人宿賃米

但シ六斗之処子年々相減シ前段

小走給

内

一同五石壹斗

送番給

三石八斗

本郷

壹石三斗

新宮

一米三石

御建御留山番給

一村内諸出入喫人賄方双方吟味之上非分なる方より出

堂所山

御建

せ可申事

初神山

御留

一御建・御留山江決而入込申間敷、自然入込候而物入

さやのからし山

〃

等出来候ハ、不残其ものゝ出させ可申事

大峠山

〃

一博奕賭之諸勝負其方角にて致吟味、取扱候ものへ手

石仏山

〃

錠ヲ打、所蔵江入可申、宿元ハ殊ニ宿之儀者かわた

大椽山

〃

共へ召捕セ御注進可申上候事

八幡山

〃

但宿元見届申出候へ者、為御褒美銀五拾匁宿元よ

一同三石

野山番給

り取立、申出候者へ相渡し可申事

六斗

新宮原

一免割九月中にいたし、十月已後見込欠算用翌年三月

四斗五升

初神庭

中に読聞可申事

四斗三升

城之はら

一惣割方者組々百姓未進出来候ハ、長百姓立会之上

内 三斗五升

中溝庭

田地証文に入、借替いたし差出、石に足り候未進い

三斗

出来庭

たし申間敷候事

三斗九升

呉地庭

但役人も引受無之様いたし可申、自然闔ニ相成候

五斗

萩原庭

節ハ其組限り闔き可申事

ノ

一腰林江入込候もの捕エ候得者、為過料米三斗其もの

II 資料編

一野山小松取江さしさはり候もの捕エ申出候もの江者、褒美として米弍斗其主より取立、申出候者へ遣し可申候、尤山番者役前の事故、不及其儀候事  
 一旅人村内ニ無願にて居候分、正月廿日限立去らせ可申、若立去不申候得へ、かわた共江申付、立去らせ可申、尚借屋主へ咎メ申付候義勿論之事  
 一他所より銀借用いたし、差纏諸入用筋出来候得へ、去る丑年御触之通り、其主より出セ可申事

卯正月十一日

用所

中溝

仁右衛門

八三郎

彦兵衛

孫三郎

市右衛門

要兵衛

清八

才次

ふれ頭  
半平

ふれ頭  
恵助

徳平

大右衛門

弥三次

九郎右衛門

重助

市郎右衛門

太郎作

去年残り

一やのし池

一かねもり池二

一貞光池

送番控人別

城之堀

新九郎

保兵衛

□ 蔵

小八

七郎右衛門

藤七

利七

彦兵衛

ノ廿五人

申值頭書

一 六月九月暮出銀之事

一 諸付引要用之外、不相成候事

一 諸普請相減候事

一 組々御給主へ之御勘定、十二月廿日限り相濟セ、目録用所へ一通差出シ可申事

一 故障事、成丈庭内ニ而取噺ひ、小内濟取計候事

一 郡借仕法、申值之事

一 御儉約筋、銘々手元ノ手厚ニ取計候事

一 子年七貫目之拝借返上之義、当卯年ノ十五年賦御願込ニ相成居候事

一 御山所締リ合併野山手締候事

一 孝志奇特之もの有之候ハ、申出之事

一 故障ニ付宿手遣夫者村聞、銀方計当人より取立候事

一 頼母子証文、満季ニ相成候而も、証文戻シ候迄者、帳切并外へ証文入等不相成候事

一 入質地証文限月相成候ハ、切戻可申事

一 証文調之節、当人・証人印形不相濟内者、給与頭加印仕間敷候事

一 一六会法銀御下有之筈、去年御ふれ有之候得共、未タ村方へ御下渡シ無之、尤割庄屋衆迄相渡リ候欵、いまた不知

一 一諸調米者十月廿日限、町借調者十二月十日限

〔解説〕 「初寄合諸格式帳」は、毎年正月に村内で守るべき事項を、村寄合で確認しあつた記録である。その内容は貢租関係・給米関係のこと、藩府から通達された重要事項、村で継続されている普請工事など多岐にわた

り、村落共同体を維持していくうえで必要な事柄が列挙されている。史料中、警察業務に当たっている「かわた」については、通史編第四章第四節社会生活と農民生活を参照されたい。また「六会法」とは、天保十四年（一八四三）から広島藩が領内一円を対象に、加入を強制して実施した六年継続の融通講の制度をさす。しかしその運用面の失敗から加入者が激減し、三年目には中止されてしまった。これまでの掛米の返却が度々延期されたまま放置されていたため、村民の不満がたかまり、論議の末ここに記載されたものであろう。

[7] 永代日記帳（抄出）

熊野町 佐々木忠夫家所蔵

(表紙)

文化七年  
永代日記帳

佐々木氏

文化七年

一殿様広村滝御上覧ニ付当村庄屋千右衛門所御小休

同八年

一少将様右同断ニ付庄屋忠左衛門所御小休

同年極月廿五日よ

一堀勇助殿喜市殿火難ニ而丸焼

同九年四月

一御留山事山伐仰付

(略)

同年  
一日照

四月より五月中照統五月晦日より三日三夜雨乞ニ

付六月朔日留作方ハ相応

同年十一月十八日  
一少将様御他界

但し十一月より翌年正月九日迄五拾日御停止

文化十一年戊正月父承之  
一曲田番水割五番

老はん 森下

四つ時迄九郎右衛門 四つ時より太三

右衛門同夜四つ時迄 夜四つ時より翌

朝迄忠右衛門市兵衛

上の坂内又右衛門分勘三郎分

式タ番  
メ五番

同年二月  
一旧家由緒御尋ニ付祖平次委細帖面仕立割庄屋上瀬野

伝心差上

同年二月九日  
一御三丸稻荷社御祭

三月午日まで御延引

同年  
一日照

四月中照統五月二日雨ふり同三日夜大ふり夫より十五日よ大ふり同廿一日小ふり

同年  
一御役所諸郡一所ニ相成

溜り村々一緒ニ而御小人郡々御役所へ取次

同年八月  
一光西坊御堂再建始ル

同年十一月より  
一国郡志編立

同十二年  
一当村権現社鳥居建立

四月十二日棟上御旅所御幸始同十五日

同亥九月十七日  
一東照権現御祭礼

九月十七日十八日相究候処雨天ニ付廿日廿一日

御祭礼

(略)

同年亥十月廿五日  
一給庄屋跡役承

祝儀鯛耆掛七匁清水耆升屋敷へ上四匁村上儀平

太殿

同十三年丙子七月九日  
一組頭格被仰付

於御用屋敷朝四ツ時御用

右ニ付 上せのへ鰹十節氣の溯式升府中へ清水耆升当

進物 村兩庄屋へ肴料

同年閏八月  
一御營

豊田郡大崎島一件ニ付御代官様海田市御出張ニ而

同年十一月廿七日  
一郡貯銀百日出ス

同年四月十五日  
一当村本宮御幸

御供鬮取萩原始メ

文化十四年  
一殿様任少将

同年丑四月  
一賀茂郡兼沢村百姓騒動広島向出当村ニ而差留ル

同年  
一右ニ付鳥目五百文

御褒美所平式百文太三八

同十五年四月六日  
一本宮神輿寄進

発端自分ぞ致シ広島宗仕や清左衛門所ニ而求中

溝御供番

同十五年六月  
一年号替り

文政元年ニ相改〔戊寅、四月二十二日改元〕

文政元年<sup>マヅ</sup>卯六月五日  
一郡貯銀指出し仰付

鳥目式百五拾文御褒美

割庄屋孫兵衛殿宅へ呼出し其後御銀者御役所

包銀ニズ御下

同年七月廿六日  
一輿蔵建立

九月廿七日相調

(略)

同十月  
一西光寺門再建

同年  
一百姓半七訴状

約メ割庄屋府中村十兵衛牛田村庄屋利兵衛海田

市亥正月<sup>カ</sup>二月始まで其後四月御吟味屋敷ニお

みて又々御吟味御裁許翌六年五月両庄屋与頭五

日追込其外三日追込半七三日追込

文政六年  
一大日照

植付相濟五月廿一日雨降其後地雨ハ不降数度雨

乞有之少々<sup>マヅ〔暗カ〕</sup>駢計ニ而七月二日朝<sup>カ</sup>七ツ時迄ふり

其後廿日ふり

文政七年<sup>申極月</sup>申極月  
一百姓半七訴状一件并御吟味海田市苗代両所へ御出張

附り城堀講中勿とも

同八年  
一右ニ付半七村追放講中勿頭取五人五日手銃追込残り

者皆三日追込儀右衛門幾右衛門無構村役人無構

(略)

同十年四月  
一権現社鳥居繕ひ

同年  
一大豊年郡々々寸志米上ル

尤麦作ハ不出来

同十一年八月九日夕<sup>カ</sup>十日朝迄  
一大風

当村家牛屋十七八家倒ス

不作

(略)

同年  
一庄屋秀太郎

十一月病死同極月廿四日与頭利兵衛庄屋被仰付

幸次郎与頭被仰付

同十二年<sup>丑三月廿四日</sup>三月廿四日  
一与頭同格連名加印被仰付 所平

同年九月  
一八幡社鳥居葺木立始メ

文化十三年子七月九日  
一与頭格被仰付 与頭同格所平

文政十二年丑三月廿四日与頭同格連名加印被仰

付

文化十三年子壬八月十九日  
一誉

同人

右者先達而豊田郡大崎東野村百姓歎筋有之旨ニ

而広島へ向罷出候御早速為被押方致出張何角立

働骨折候段志宜ニ付

文化十四年丑四月  
一鳥目五百文

同

右者当春賀茂郡兼沢村百姓とも騒立其村辺迄多

人数罷出候処其御早速罷出取繕段々骨折致心配

候ニ付為御褒美被下候

文政元年卯六月  
一鳥目貳百五拾文

同人

右割庄屋共発起を以相調候郡貯銀之内へ同意致

出銀之段厚志甚以寄特ニ付

右去ル五月寺西仙之進様御役所雷火ニ而焼失ニ付役成

御賞等御尋ニよりて九月御用掛割庄屋同格牛田村利兵

衛殿へ当村役人一緒ニシテ書出ス

文政十一年子九月

(略)

文政十二年丑四月  
一まかり田川瀬替

五月廿四日大洪水諸作なし

大豊年

同十三年寅二月  
一まかり田瀬替 勘三郎分

同二月  
一御用寸志銀郡々村々へ被仰付

右公儀御縁段御物入ニ付

同年七月末  
一西光寺寂照去丑極月病死ニ付新発意証道へ住職被仰

付

同一年  
一大悪年大風ニ而綿杯枯ル諸作六步尤麦ハ上作

同十三年寅十一月廿一日辰申刻  
一殿様御逝去

右ニ付翌年正月廿日若殿様へ御飯水野出羽守

様御宅ニおゐて御名代美作守様御老中不残出席

之上ニ而被為仰付候趣正月廿八日御触尤二川清

記様御下リ之上御触被為在候也郡中へ御御

忌中ニ付三日之間諸業不相成三日過候得者焼土

等不苦之事

II 資料編

右ニ付五日過候ハ、寺内ニ而勤行不苦七日過候  
ハ、木蕉不苦鳴物ハ急度御停止正月廿六日鳴物  
小祭等ハ御赦免

(略)

- 天保三辰二月廿五日
- 一西光寺証道病死
- 同四月の八月迄
- 一光教坊御堂瓦葺ニ相成
- 同年
- 一大日照

中五月廿四日六月十七日雨降少し之時雨もなく  
七月晦日少し□雨有之八月四日夜雨降七日迄降  
八日暴風雨至極静

(略)

- 已十一月十八日
- 一栃原村庄屋被仰付
- 同日
- 一長百姓勘三郎与頭本役長兵衛与頭同格連名加印被仰付
- 同五年午のとし
- 一大日照

中五月十五日五月廿三日之雨ニ而植付六月四日  
五日雨降七月十一日九日少し雨降八月六日風雨

同六月 (略)

- 一石数高直米石ニ付式百目ニ相成
- 同八月五日
- 一十一代目健太郎御給人三上勘六様給庄屋被仰付
- 同八月
- 一堀祐助跡目役
- 同申五月十四日の六月十二日迄
- 一長雨洪水

六月十二日洪水ニ而所々川橋落流家死人有之  
天保六未十月  
一饒津大明神初而御建立

明星院境内山二葉山と号御先祖浅野弥平様御神  
号ニ相成午年普請相初リ申五月成就同十五日社  
参初日右御神号御下向之刻老<sup>(實)</sup>田へ出役御用相  
勤ル  
同七申年  
一大不作

(略)

同酉春  
一大飢饉  
米老石ニ付金拾兩位諸国渴死多し御領分人六万

余死ス疫病流行

- 同九年戌三月式日
- 一御給知一統御割替ニ相成当村御給人四拾三給御割
- 出御明知方七拾石余
- 同年三月二日
- 一庄屋千兵衛病死
- 同九年戌六月廿一日
- 一公儀御巡見

上瀬野村  
老實田御望

諏訪□□介様 野村金右衛門殿所

竹中彦八郎様 壹（實）田万右衛門殿所

石川大膳様 同孫右衛門殿所

右御同勢様方郡限り御案内勤

同十年亥六月十七日

一山本屋祖平次殿当村庄屋ニ相成

同し 一千兵衛倅来助殿燒山村庄屋ニ相成

同七月 一村方限り小内諸帖面清算立歩ニ相成利右衛門引負

同年 一長百姓五人年行司七人ニ相成

同年九月（略） 一村筆者相動ル

同年より 一社論相始ル

天保十三寅二月四日 一与頭格御賞被下

御代官寺西直人様御役所ニ而

同年 一与頭幸次郎殿庄屋見習ニ成

同年極月十八日 一与頭本役被仰付

御代官寺西直人様御役所祖平次殿支配役半八郎

子初太郎社倉十人頭取順之助与頭ニ相成とのほ

り源左衛門与頭格御賞

（略）

同極月 一金札高下国札ニ而金壹兩七百目内外翌卯年九百三拾

目位米石に付壹貫目内外

同年 一社論ニ付兩社人差留メ雇社人奥海田村春日舟木保殿

来ル

丑年（略） 一地起鐵先見取取立

高壹石ニ付壹升之割合并家別式升宛割戻しニ相

成翌寅年（略）

卯三月廿八日（略） 五月迄 一兩社人御吟味初日訴訟差入候者有之

天保十四卯六月九日 一御譽

郡貯銀与唱上ケ銀致候ニ付

同 一起地見取米差渡候ニ付庄屋へ鳥目三百文ツ、組頭江

式百文ツ、長百姓江百文ツ、百姓江五拾文ツ、被下

同年閏九月朔日 一役格与筆並差纏御窺出候処格式ニ不相抱本務通り取

計私用計リ格式通取計可申庄屋代勤へ私用之砌ハ与

頭次席可取計旨被仰付

寺下惣次郎様 荒木寛左衛門様

三上武八様 森彦右衛門様

松村平八郎様

右御申値之上被仰付候事

(略)

- 同年七月
- 一銀札下落老叡ニ付老<sup>〔實〕</sup>ノ四百卅目
- 天保十五年辰極月十三日〔十二月二日〕改元
- 一年号相替る

弘化元年ニ成

(略)

- 弘化四未十月
- 一金老兩銀札貳貫六百目通用御改印相渡リ正金御引替
- 被仰出
- 同年
- 一金老兩上リ詰メ札三<sup>〔實〕</sup>ノ四百五拾目位取引

但米老石ニ付札四貫目位

- 同五年申年
- 一年号替る

嘉永元ニ成

(略)

- <sup>〔嘉永〕</sup>同元申
- 一大洪水 御家流死多し
- 弘化三年
- 一大洪水 御家流死多し
- 嘉永貳年四年
- 一水風兩難不作
- 嘉永三成年
- 一水風兩難不作

大飢饉米老石正銀ニして百七八拾目位国札下落

金老兩代六貫目位

同極月

- 一村方郡方限リ御願申上正銀取引御免許之上戊正月ノ
- 正銀ニ致し免割小帖并ニ極月取立旧札百目ニ改印札
- 正銀等老叡取引去ル丑年ノ綿座御切手之分百廿五匁

位

- 同四年亥暮
- 一旧札表向四拾立御触ニ而小内五百立位取引
- 同五年子正月九日
- 一旧札綿座御切手共金老兩ニ付三拾貳貫五百目相場被

仰出

閏二月四日ノ改印札ニ御引替相成

- 同四年亥秋
- 一豊年

諸国米価下落米老石代正銀八拾目内外

(略)

- 一去ル午洪水ニ付割庄屋□□殿ノ熊野村ヘ貳拾<sup>〔實〕</sup>ノ目
- 矢野村御拜借銀百貫目之内分借致候趣被申出初度御
- 吟味之節一応御聞濟之处再御吟味ニ付騙之義相尋シ
- 右同意致并帖面書直し彼是不埒ニ付庄屋□□殿役
- 義御取上ケ追込其外庄屋与頭筆者不殘追込被仰付

一右之様元矢野村不人氣より事起御拝借并御救銀等村

方弁利を考御主意ニ反し取計致候ニ付割庄屋□□

殿矢野村与頭□□殿役儀御取上追込其外矢野村役人

不残所閉嘉永五年

一金壹兩御改印札ニ而六拾四匁丁銀壹貫文ニ付九匁五

分三厘九六錢ニ而改印札壹匁ニ付百五文丁銀ニ而百

壹文

一札場壹兩替出金貳步入金壹歩口錢已前之通右之通被

仰出候事

一楮御直段当子年子閏二月御改已前之通御仕入楮六貫目替過

楮五貫目替被仰出候事

一定之丞様御事被任從四位伝從上総介様と御名改メ子

五月廿五日御入国

一去ル丑年同年の綿座御切手相初リ銀札同様專通用致候処

銀札下落ニ付当度改印札壹匁ニ付旧札同様五百目ニ

而御引替先日被仰出候処右御引替限月当八月中過候

ハ、旧札綿座切手共通用停止被仰出ル

一貳百十日七月十七日ニ當候得共天氣快晴穩和ニ而諸

作共見事ニ出来

一同七月□屋半八棹弥三後家広島住居相止婦村致多分北原多

川ニ居る

一同年夏洪水秋洪水三度大風諸木転ひ新宮大川筋出来庭小

川筋所々切損御番与十川直之助殿御見分急場銀拾

目御拝借此内七貫目熊野村五百目平谷村壹貫七百目

矢野村八百目押込村都合拾貫目辻村々連名証文利足

月五朱ニ割庄屋野間太兵衛殿奥印九月三日御銀渡

リ熊野村の御役所へ罷出る

一上瀬野村野村孫兵衛殿当郡上組割庄屋本役被蒙仰候

ニ付同月八日御役所之□ニ罷出る

右同日白水殿源兵衛押込村庄屋被仰付

一大日照、中五月十五日

四月十五日大雨にて御神幸相止同十六日御幸同日の

五月十五日迄日照同十六日十七日十八日大雨出水從

夫八月三日迄照統島作委皆損稲作凡三步方枯ル八月

三日夕七ツ時の同夜迄雨降る

但し五月二日朝と七月十六日夕と兩度夕立雨少

II 資料 編

しふる其外一円不降

但村辻江銀八貫目年五朱五ヶ年賦御役所才覚御

貸被下

一公方様御不例之処先月廿二日薨御被遊候依之普請鳴

物停止之旨従公儀被仰出候条今日ハ諸事穩便ニ仕火

ノ元別而念入候様被仰出候此段可被相触候已上

八月三日

御付紙

此節魚鳥かたき売用捨尤御領分五日之間狺留メ遠郡

之儀ハ相達候日ハ五日之間狺留メ之事

一公方様薨御ニ付姫君様御兄若殿様御養母方御叔父御

定式之御忌被請候此段夫々可被相知候以上

八月三日

別紙之通被仰出候条此旨相心得末々迄不洩様相触可

申者也

安芸郡御役所

丑八月三日

八月十八日ハ仕懸候普請作事不苦九月廿二日ハ鳴物

不苦旨御触出し

十月十日  
一庄屋見習与頭幸次郎殿病死

当丑四十歳

十一月

一江戸江アメリカ国軍艦四艘渡来

四月嘉永六年也  
一長崎へおロシヤ国ハ大船三艘来筒井肥後守川路左右

門尉御下り翌寅二月静り御登り

一江戸浦賀内海江アメリカ大船九艘渡来諸国御大名様

方御出張大筒石火矢数々御調寅三月引払之由

寅四月  
一御儉約殿敷被仰出右ニ付郡中締り合廉々為用談矢野

村庄屋助一宅ニ而五月十一日ハ十六日迄左之人々集

会申值頭書相調村々江廻達有之

割庄屋 野間太兵衛殿

同 沢原八左衛門殿

同 野村孫兵衛殿

同格 利三郎殿

割庄屋代勤 吉右衛門殿

蒲刈庄屋 千兵衛殿

同格 倉橋庄屋

□ 同格  
太郎右衛門殿

社倉支配役  
吉左衛門殿

同 牛田村  
保太郎殿

同 奥海田村  
和 助殿

同 矢賀村  
栄次郎殿

海田市年寄  
久右衛門殿

大屋村庄屋  
雄 助殿

焼山村庄屋  
熊野村与頭 健太郎殿

右人々掛御用申□相調  
同年九月廿四日

一割庄屋組替ニ相成上組引受庄山田村沢原八左衛門殿

被仰付

同年  
一十一月五日大地震諸国<sup>ノ</sup>浪浪人家土蔵破損船岡江揚リ

候人多死六日七日ゆり不止翌卯正月迄地震日々不止

但中国輕し当村地わり少々有怪我人崩家無之尤

家出飯小屋住四日有

同年  
一極月朔日御役所野田七郎右衛門様御代官ニおゐて左

之通被仰付

熊野村庄屋被仰付 組頭健太郎

同見習被仰付 同 順之助

同与頭被仰付 庄屋格長兵衛

同与頭被仰付 庄屋見習 彦三郎  
幸次郎俸

同年極月五日<sup>ノ</sup>十一月二十七日

一年号相替安政元年

翌卯正月御触相廻る

全嘉永七寅年安政元ニ相成ル

(略)

一前年九月八幡社御道具并装束共小損ニ而寄進祭殊之

外賑々敷

但寄進自分発起ニ而自分宅江庭々立寄申値同廿

卯四月 一日広島ニ而買調六庭々庭頭老入ツ、罷出

一八幡社鳥井再建大工重次清八作兵衛為助メ四人銀三

百目請合但木椀とも

辰七月十四日 一洪水ニ付新宮川之破損并出来庭川同廻リニ付別割高

ニ付夫三人懸リ

翌巳年越普請残同様高三人懸リ別割

同七月廿三日 一山田殿秋四郎儀与頭同格連名加印被仰付

長百姓惣助

同彦右衛門

兩人與頭格御賞

(略)

同廿日  
一與頭長兵衛病死

一前年九月十八日京都二条殿御内入江伊織と申值紀州

中島大津領友右衛門貸銀瀬戸倉橋能美島忠海町蒲刈

島広島之在等式十七人相手取御国方江御駈引一件約

の方途

御役所被仰付於広島相約夫々相約り極月七日帰村

右約加席庄屋同格瀬戸島寛兵衛佐伯郡相勤海老塩浜

庄屋千右衛門

辰三月  
一御留初神山毛上御下ニ相成御山手銀六拾目差上村中

薪ニ配当十口内巻口中溝巻口初神巻口出来庭二口上

のほり二口萩原巻口半呉地巻口半新宮原メ代銀巻口

百六拾目ツ、秋配当代銀巻口百目ツ、

入木庄屋与頭江致ス

巳七月三日  
一山木屋豊三郎栃原村庄屋ニ相成□屋長左衛門熊野村

与頭

(略)

巳九月  
一社倉支配組頭取周平歎ニ付御役免式百文被下

一右社倉役長百姓兼右衛門江被仰付

同十月廿七日  
一庄屋市郎左衛門庄屋見習与頭順之助

右兩人御役免

一庄屋市郎左衛門俸健次郎被仰付

午四月十一日  
一殿様御隠居被遊御名改備後守様と御改少将様と奉唱

候事

同  
一若殿様御家督御相統安芸守と御改殿様と奉唱候事

右四月廿日御触出し

五月廿一日  
一洪水ニ付新宮川筋所々切損地損砂入凡五町計リ

巳九月  
一八幡社御神鏡三面自分寄進本宮社同巻面小帖聞

午六月五日  
一孝子みつ御米三俵被下之

同十五日朝御蔵所ニ而相渡ル

同十八日  
一社倉支配役山木屋祖平次殿歎ニ付御役免跡庄屋同格

被差置代跡役焼山村庄屋雄助被仰付

同  
一熊野村社倉在組頭取兼右衛門被差免与頭役被仰付

一与頭彦三郎社倉在組頭取兼帶被仰付

安政五年

一公方様八月八日薨御被遊候依之御先例之通鳴物普請

停止之旨従公儀被仰出八月十九日御触出廿日夜村着

触示し

八月廿三日居城屋根替御免

一右ニ付村々氏祭不相成十月八日まで御穩便五十日之

間也十月十一日氏祭相濟

同年

一八九月頃ころりと申病流行諸国死人多ニ付従公儀療

養書御下ヶ被遣右病手足より俄ニ病氣一忒時之内死

去ス右ハ手ニテモ足ニテモ病取付候思候時ハ直に其

手足を括りとかぬ様いたし針をいたし黒血を出しい

ゆる事多し必血をぬき候分ハ助るよし

同年

一霜月二日殿様於江戸御逝去被遊同十一日御穩便被仰

出三日戸メ農業一日メ五日過候ハ、居職御免火葬焼

土山稼魚鳥かたき売御免普請鳴物講寄法座説法不相

成謡三味線手□稽古御穩便中不相成役人七日間月代

不相成尤非常之節ハ撞鐘左報不苦旨被仰出

一殿様御尊骸御国江被為入尾長村端川寺へ御着棺被遊

翌日御入寺之御行列ニ而国泰寺へ被為入候筈候事

同十九日 一右ニ付御代官様御示しも候ハ、御廻村当村庄屋健太

郎所御帰リ

未三月十六日 一御簀

庄屋健太郎

御奉書頂戴

中年 一年号万延ト改元被仰出閏三月朔日〔三月十八日改元〕

但安政七年ニ相当ル

酉年 一年号改元文久元

万延元年ニ当ル

同夏 一府中辺海田川等掘浚出銀致候ニ付海田市ニおゐて御

代官三田村保右衛門様御出張御簀書頂戴健太郎

同七月八月八日迄 一紀州勘兵衛蒲刈島七人共蜜柑代差纏健太郎メ方被

同九月 仰付広しま竹屋町村上屋ニ而出勤約メ相濟

一殿様御回在被遊庄屋健太郎所御昼宿御本陣被仰付十

月十日御入被遊湯殿新建豊新調自分取計

同五月廿三日 一右ニ付御代官三田村様御役所ニおゐて健太郎江賄代

書老枚御銀三拾目右両品被下之

西秋 一大豊年諸作万熟尤麦作不宜

同四月 一広島本川掘浚賑々敷

同月

一京都諸大名様御詰さつま長州殊之外御威勢之由

文久三亥三月

一大坂宮川町大和屋安次郎仁保島之者拾四人滞銀差纏

ニ付御蔵屋敷御添書持参御役所江出願仕候ニ付健

太郎約メ方被仰付於広島世良屋海田市与頭吉兵衛出

役三月十六日五月十五日迄ニ相济郡御役所へ御達

書差上帰村

同三年

一亥五月郡々御代官所相止郡御役所ニ相成諸郡一統

ニ相成候事

一郡々御用所と唱御代官御出張当郡始メハ呉之町金蔵

殿方後庄山田村新左衛門殿宅秋頃右場所御引弘ニ

相成

一御番役名目相止郡御役所調役与相改当分かヘニ有之

候分郡御役所筆役と相改リ候事

一郡廻リ御役名相止候事

亥秋

一所々御台場御築調大砲御仕構始る

一広島片河町天満町横川三ヶ所町門始る

一亥極月郡々御用所出来御代官様御家内連ニ而御出

宅尤安芸沼田ハ御出張無之

〔二月二十日改元〕

一子二月廿二日年号元治ニ改元被仰出

一子二月朔日寺々大鐘撞之義御停止被仰出

一子三月改被為旅人宿引受不申事道意ちゆ人親類ニ

而も無願一宿不相成被仰出

一同月始而海田市へ郡用所出来

一同月御軍用銀御取替候事御内々

一同月農兵被仰出

一亥暮郡割地浦惣割尤一ヶ年限リ之事

元治元子正月

一御領分駅々人馬賃錢五ヶ年之間四割増御触出

一郡御役所ニ而御代官頭取御用番月々御老人ツ、御引

請ニ相成

一郡御奉行様町奉行上席ニ被仰付御郡代之儀ハ御年寄

御勤被成候事

一御貸鉄砲自分筒共名前申出候ハ、勝手ニ所持被仰出

候事

子二月廿二日

一高野山龍地院焼失

同年

一筑前国宇佐宮豊前国香椎宮両宮へ奉幣使按躰中将様

御下向六月三日上セの御屋海田市御泊り御重宿五日

御立御帰路ハ七月三日海田市御泊リ四日上セの村御

昼尤御帰路之節ハ御賄料として上分金百疋ツ、下分

同五拾疋ツ、差出正米ニ而御飯さし上ル御本錢惣料

金相勤ル

同五月  
一革田共馬苦勞御制禁被仰出

同七月被仰出  
一人足弍拾五人

馬弍拾五疋

右定数ニ而其余御大夫様方御通行被仰付候共引受不

申尤相對雇之義ハ懇ニ肝煎定賃錢江弍拾倍増乃至百

文之所へ三百文受取候事郡御役所被仰付

同一年  
一七月十八日ハ廿二日迄京都砲発大火凡七歩位焼失大

軍兵庫ハ伏見辺同断死人不知数

子八月  
一御城下

猿猴橋之根

横屋橋之根

横川橋之根

沼田郡江波村

安芸郡海田市

同郡牛田村日通寺前

佐伯郡廿日市

高宮郡可部町

右之通人馬御改関門御番所相調

同八月  
一矢野村土橋之根

船越村土橋之下

海田新開土手

右御関門相調

一御城下旅人通行御停止

海田市ハ廿日市迄番船御取調毎夜船渡ニ而御改

同八月廿日過ハ  
通行之事

一十六郡夫々御役所御建調御代官様御作方御出張諸向

御請引被下候事

但下地之通何郡御役所唱ニ相成

一六月五日雨ハ八月十三日迄照統諸作旱損夫より兩度

も稲作ハ凡老歩通り畠作凡八歩位損尤作方取実凡去

同麦作ハ格別宜

八月  
一京都表乱妨人等有之御所近ニ而砲発出火等ニ付彼是

御配慮被思召候間当分神事祭礼鳴物等見合候様日々  
可被違候事

右従公儀被仰出候ニ付当月中神事祭礼鳴物等見合候  
様被仰出候事

一旅人御改敵敷度々被仰出非人たり共村内(付)イセ不申□  
人体僧俗共差当□不申宿一円引受不申事

元治元二年  
一防長御征伐松平大膳事父子誅伐之儀従朝廷被仰出東

国者広島江尾張先大納言様御惣督として諸大名様方  
大軍ニ而御参集海路ハ小倉表へ同断北国ハ石州へ同

断八月十五日廿三日被仰出十月下旬極月ニ迄日  
々軍馬御下向尤極月下旬御引取丑正月七日迄ニ御

大名様方不残御引払ニ相成

右之時尾州様御本陣ハ御城内浅野甲斐様御屋敷其外  
ハ寺々不残人夫百姓ハ町家凡尾州様計ニても十万人  
余之由

一右長州討手芸州様一ノ先被為仰承草津迄先陣出張之  
所へ長州ハ御家老増田福原国司等不忠軍謀企之趣ニ  
而岩国城主ハ右三人之首を取当国へ持参国泰寺ニ而

霜月十五日御実驗諸大名様御会集着具言語ニ絶候事  
委敷ハ御触状ニも有之候

一右御討手一ノ先御出陣ニ付人夫百八拾人熊野村へ被  
仰付あき郡ハ千人之辻

内 五百人 霜月十三日広島出  
五百人 同十六日 同所之筈

一右千人頭として引纏役庄屋健太郎へ被仰付外ニ牛田  
村庄屋所平右兩人十一月十三日郡御役所御勘定所へ  
罷出人夫五百人召連大砲其外持運草津陣所詰メ御旗  
頭御番頭足輕凡三千人外ニ上田様御出張是ハ古江村  
迄兵糧ハ草津三ヶ寺ニ而調

一郡印ニ幅幟三ツ引あき郡ト書入

村印あき郡何村ト書入一幅幟夫頭割羽織一刀ぬり笠  
罷出千人頭健太郎所平兩人ハ帶刀割羽織ぬり笠幟持  
屯人三ツ引中□持屯人人足屯人ツ、召連外ニ手伝と

して熊野村長百姓八十七同道十一月十三日ハ廿九日  
迄相勤一応右御陣所御引払ニ付婦村人夫不残婦村い  
つれも□忌右之刻高宮郡ト安芸郡沼田郡三郡ハ罷出

申候十六日之分ハ延引諸郡も出候処延引右矢野村

庄屋見習熊野村勘左衛門義も御用被仰付候処十一月

廿五日更代として罷出候へ共御用濟御引弘之頃故□

□敷罷帰と聞

一右御参集ニ付而ハ他国御家中様人足等熊野村も□□

通行

一正月式ハ不相変取計ニ相成尤広しま年頭六日始メ

一割庄屋上組呉弥次郎殿同組中野村吉四郎殿被仰承十

二月廿五日頃

一長州御征戦ニ付庄屋健太郎出陣之時役人長百姓同家

へ罷越酒を出し人夫之者も罷越候ニ付酒と膳と幟を

立馬ニ乗御用人夫引連夫頭付添海田市ニ而郡中人夫

出揃従夫中柄式本いづれも三ツ引てウちゃん大小幟凡

廿本広しま壱丁目御門も入同夜人夫泊り御札場役所

并御勘定所其外諸役所御上御賄ひ被下并壱日分五分

ツ、小遣被下熊野村人夫壱日金貳朱之定廿歳も

五十歳迄くじ取ニ而罷出る

夫頭 一三右衛門 菊蔵

〔次左衛門 八十七

与三右衛門 源次

就中  
伝三郎 更代

右小内人別何角陣中日記ニ有之ニ付略ス

一村々ぬかわらし馬沓飼葉こもなわ御用被仰付差出

ス諸国大さわき

但夫々代銀渡し候て式分渡ニ相成

元治貳年(四月八日改元)  
一丑四月十八日年号慶応と改元被仰出

態申遣ス

来ル廿日晝八ツ時御供揃ニ而若殿様広村辺江被成御

座候ニ付御道筋并ニ御小休所委細別紙之通尤被為入

候節者呉浦も御船被為召候間諸事差間無之様取計尤

此度へ御手輕ニ而下方迷惑ニ不相成候様第一之御趣

意ニ付御小休所其外之事迄も御仮成ニ而御趣意ニ候

得者右様相心得取計可申右ニ付御附廻り左之者被差

出候且又御往来村々役人共御先払出方等之義者例之

趣を以差間無之様取計可申者也

調役

永井庫二

広村滝

大林林左衛門

安芸郡御役所

一 広村

一 吳町

丑五月十九日

已上

海田市

矢野村

平谷村

熊野村

吳町

右村々

役人共へ

右之通被仰出御途中ニ而矢野村庄屋助一方御小休才

の神御野立熊野村庄屋健太郎被為入亀割御野立津江

村吳町ニ而庄屋市郎右衛門方御小休蒸氣船御宿同夜

被為入候

廿四日朝五つ時被為入四つ時御出□□被遊健太郎船

外ニ而御着并御立座之席共御門前□□罷在候

但御同勢凡百六七十人

御別紙

御道筋御小休所左之通

一 矢野村

此間ニ而御野立 時々取

一 熊野村

庄屋健太郎

一 津江村

割庄屋佐々木所左衛門

様御先手入込

一 井伊様廿日市柳原様海田市紀州氏先鋒可部町松平三

河守様吳右御宿陣

寅〔慶応二年〕五月 一 長州御家老宍戸備後之助広島ニ而召捕広島預ヶ御老

中小笠原老岐守様御意右宍戸長州江被帰御当国御

付人

寅 一六月八日大島郡軍始り

一同十一日岩国領軍始り

一同十二日佐伯郡大竹村軍ニ而井伊様柳原様大敗軍井

伊勢廿日市へ引柳原海田へ逃帰十一日夕から十二日夕

迄兩軍共喰事不仕趣又十三日紀州勢誘ニ依而柳原広

島迄と罷越

一十五日より郡々御軍用人夫広島へ操出し

一十六日広しま大驕之由候へ共無事十七日ハ殊之外損

なり

一十八日夜より玖波辺大軍之由ニ而昼夜大砲響磬

一十九日大□大軍之由紀州御家老打死之風聞尤長州方

敗軍五百人計損之由

一同日岩国口打手ハ長州大敗軍之由

態申遣ス

即今形勢ニ付此場合庄屋以上之者ハ一同帯刀被差免候

間弥以勤向厚心を掛期日切迫之場合ニ付人心引立いつ

れも報国之志を磨□国之力を以邦家堅実之御備相成候  
様別而厚駈引可致もの也

寅

安芸郡

七月十八日

御役所

割庄屋 与三兵衛

同 甚内

同 清左衛門

同 源次郎

同見習 沢原繁太郎

下御付紙

本文ニ付割羽織袴着用不苦候事

右御触書写焼山村ニ而同十九日武井雄三郎様糸原加藏

様御寄村之節割庄屋源次郎殿繁太郎殿より示談有之候事

八月廿四日

一村々志之者金貳拾兩差出候得者御役格一段上ヶ御内

々として郡御役所片岡多一郎様当御役所□□多三郎

様当所御泊り番ニ而長百姓共迄御説得有之金子差出

II 資料編

候者へ渡す御賞役人格被仰付候事

一七月廿七日小倉落城之由

慶応三年八月廿日

一公方様薨御被遊候ニ付普請鳴物停止被仰出候廿六日

御役所へ御触出廿七日組着廿八日庭触

一右ニ付一橋中納言様御相続被成候ニ付上様と奉称候

事

態申遣ス

御穩便中猥ニ炮発不相成儀者同論ニ候処奥筋村々稲毛猪鹿喰荒之威筒之儀者村々庄屋共手元へ願出候へ、糺之上差免候様可申付者也

寅 安き郡

八月 御役所

一九月差入御穩便為見廻御代官様村々御廻村之事

態申遣ス

此度御蔵入明給共高百石ニ付正米拾石ツ、郡中村々江

御残し米ニ相成候間御蔵入明知を初メ給知共其余之持

高ニ応し有之割合を以残し置候様与合村々江早々可申

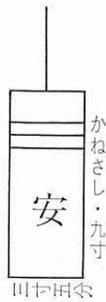
聞者也

安芸郡

九月 御役所

割庄屋宛

一即今之形勢ニ付組頭役格之者共此場合袴着用差免候間弥以勤向厚心掛人心引立御国配不相成様駈引方手厚可申談并与頭已上真宗寺院社人医師迄も左之通袖印相調場合ニ寄相用候様可申聞者也



七月廿二日  
あき郡  
御役所

割庄屋共

一右ニ付長百姓此場合一刀被差免候事

八月の

一官軍追々御引払ニ相成人数計少々宛御残置ニ相成候

事

一公儀衆御宿駅賄方左之通

一昼夜屯人ニ付米六合塩噲代三十文灯油六才

ツ、外ニ少々炭薪相渡し候事

七八月頃

一米石ニ付金凡拾兩内外

御總便中

一八月廿九日

中之者竹鎗鉄砲鎗鎌程之手道具携出松明灯しときの

城山ヲ包ミ同四ツ時引払候事

八月

一村々御貸筒鉄砲御引上ケニ相成熊野村威筒七挺郡用

所へ出し返上

七月頃

一此米御寸志銀取立代米ニして後日帖面差上ル

一公儀御人数九月十五日限り御引払相成候事

一九月廿日鳴物不及用捨旨被仰出

此度ハ日数十五日之間御穩便八月廿六日の九月廿四日

慶応二寅極月廿九日

一主上様崩御ニ付普請鳴物停止之旨正月五日被仰出普

請作事二月三日の有宥ミ同廿六日の鳴物不及用捨候

同赦五拾日ニ相成

一長防討手暫時兵事見合セ從御所被仰出御国表ニ付一

同解兵被仰出

一諸色高直諸国村々下方不人氣賀茂其外騒敷事

一于田忠右衛門跡田地売払自分買受代銀永代口上ル并

一上方伊勢御被并ニ御神鏡金鏡等品々江際

一御当国様於御所儀定職被為仰蒙

一金銀下落ニ付伊勢御初穂当年の已前銀壹匁之処米壹

升ニ相定米御初穂ニ以来頼来リ候事

一前小藏立調候

一異国の炮箆御買入ニ付村々寸志銀差上ル金式拾兩已

上差上候分ハ御役格御賞レ

一米札相始ル御年貢正米御引替被下候筈後々定相場銀

札ニ而石六百目通用

一少将様御逝去被遊御穩便被仰出三日之間猶

〔解説〕 この永代日記は、熊野町の佐々木家に伝わる

慶応二寅極月廿九日

第三章 近世の資料

もので、文化七年（一八一〇）から明治末期まで書き継がれているが、本章では江戸時代の部分のみを掲載した。ただし、全く私家の冠婚葬祭や出生に関する部分は省略した。

かなり大雑把な書き方で、年間に一・二項目しか記載されていないかったり、干支の順が逆になったりしているが、村内・郡内のできごとのみならず、ペリー来航も記されている。二度にわたる長州の役についてはかなり詳細に記述されており、興味深い内容となっている。

〔8〕

村中覚書并御公儀御定法 但村格敷帖

熊野町「川角区共有文書」

（表紙）

村中覚書 并	
御公儀御定法	
	但村格敷帖

村方格式帳

一 寺社入用、村中へ入可申事

尤品より氏子・門徒中より可仕事、其上役人見合

一 庄屋居宅広敷之分、不残村方より可仕事

附、兼面敷之儀ハ旁七年立候ハ、仕替可申事、

其外村入用之物と相見候類、右同断之事、尤庭敷

新宅之儀ハ、其□□可仕事

一 用所御向相勤候儀者、村方より一夜詰ニ可仕事

附、□米定ニ而雇ひ可申敷、又ハ村方廻り番可仕

敷、年正月十一日ニ長百姓用所へ立会、庄居の相

談仕、下方百姓へ追而可申聞事、尤用所より外ハ、

小はしり番等を呼まねき申聞敷事

一 御用木之類、伐可申事堅無用

一 村中田地百姓預り、自分□下田地より上田地崖、三ヶ

年老□、尤木・草をさらへ申事ハ、上田地仁よりさら

へ相□可申事、尤所より年数ニ而けつり可申事、

若又□違も有之候ハ、長百姓共□見合之上、当

分ニ境くひを打敷、又ハ石ニ而もすへ可申敷、□

よって庄屋ニ願出可申事

但、すきかき之節、□稲かぶを付可申事

- 一 先年有来之木、役人見合志だ打仕、新木堅無用
  - 一 田地畠之ほとりへ木・草類立申間敷候、山藪ほとり  
切かり之山藪主が切かり相済可申事、尤御定法、老  
間宛候へ共、其内見合藪之分へ、木を立申事堅無用
  - 一 往来道四尺之御定、村内小道三尺定、相違も有之候  
ハ、役人共見合、先年之通可仕事
  - 一 村中田地あて水之事、先年〆〆置候、水脇を以、  
先之通り可仕事、尤天水之所にて役人見合可仕候、  
若人万一畠堀仕、水あて候事堅無用
  - 一 新開仕候ひらきへ、願出候御免之上、ひらかせ可申候
  - 一 おこし地〆〆之見取米取出可仕事
- 附、無高之分、水あて申事堅無用
- 一 新屋敷仕候へ、地境式間宛あいおき家立可申事、  
尤人々相談之事ハ格別、其議論至候而へ、御上へ聞  
届ケ無之候
- 右条堅相守可申事、尤相背候（後欠）